The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	国旗<日の丸>を考える
Author(s)	秋山, 哲男
Citation	デザイン理論. 1977, 16, p. 46-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53700
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

国旗〈日の丸〉を考える

秋　山　哲　男

はじめに

国旗とは，その国そのものを象徴するシンボルであると同時に，その国の構成員である国民全ての本質と理想，そして，尊厳そのものをシンボル化したものである。

いわゆる〈日の丸〉が日本のシンボルであることは誰れもが認めるところであるが，〈日の丸〉の旗は，きわめて明快でシンプルなデザインであるため，明視性も高く，世界各国の国旗と比較しても，優るとも劣らぬ素晴しい視覚効果をあげており，これ以上のデザインは考えられない，とさえいわれている。

しかし，それにもかかわらず，今日もなお〈日の丸〉論議が起るもっとも大きな理由として，この〈日の丸〉の旗には，日本の国旗として位置づけられるべき明確な法的根拠がないことがあげられる。

〈日の丸〉そのものの歴史は，一般には文武天皇の時代にまで，さかのぼることができるとされているが，〈日の丸〉が今日的な意味において，日本という国のシンボルとして用いられるようになったのは，江戸時代末期以降であると考えられる。幕末にいたって外国との通商が活発化したのにともない，日本の船舶にも日本を表示する意味での「船章」を制定する必要にせまられ，安政元年には「日本を表示するものとして『白地日之丸幟』を総船印とする」という布告が，幕府より全国諸藩に伝達された。

しかし，この布告による旗は船舶用として定められたものであり，国旗を規定したものではなかった。そこで，明治新政府は，明治3年1月27日に，太政官布告「第57号」(以下，単に「57号」とする）により，一般船舶にかかげるべき，祝日，平常，風雨用の旗として，大，中，小の3種類の旗の規格を定めた。これらの旗の縦横比は，いずれも7：10で，日章の直径は短辺の5分の3，日章の中心位置は旗面中心より 100分の1だけ，旗竿に寄る，とされている。

ところがこの一方で，明治政府は同年10月3日には太政官布告「第651号」（以下，単に「651号」とする）により，海軍に所属する艦船に表示すべき国旗として「海軍御国旗」を定めている。これはその後，明治22年10月8日の勅令第111号〈海軍旗章条例〉によって最終的に改正されたが，それによれば，〈日の丸〉の旗の縦横比は2：3，日章の直径は短辺の5分の3，日章の中心は旗面中心と一致する，というものであった。

しかし，政府当局では，国民旗としての〈日の丸〉の旗に対する法令が，その後も全くないことから，昭和5年12月15日付の文部次官宛内閣書記官長回訓により，〈日の丸〉は「第57号」様式によるべし，という一応の基準を打出したものの，現在もなお，われわれが考えている国家，民族，文化を象徴する意味での「国旗」を制定したものが存在しない状態は変りなく，現実には，まちまちのプロポーションの〈日の丸〉の旗が存在し，しかもそれら全てが，慣習的に国旗〈日の丸〉として使用されているのである。

〈日の丸〉の旗を現状のまま，慣習法的な観点から認めてしまうことも，現実的で有効な解決方法であるとも考えられるが，明確な規格もないまま，今後もまちまちのプロポーションでイメージ的にも異なる〈日の丸〉の旗が存在し，公的に使用されるという状態が好ましいとは考えられない。さらに，国旗の性格，意味からみても，国際信義上，問題を残すとも考えられる。

また，この〈日の丸〉については過去の歴史的な側面から，非常にデリケートな要素を含んでいることでもあり，ただ単に，法制上の観点からだけではな

く，あくまでも，国民旗として真にふさわしいイメージを持つ〈日の丸〉の旗のデザインを慎重に検討し，国民的コンセンサスを得た上で，その規格を明確に定めるべきであると考えられる。

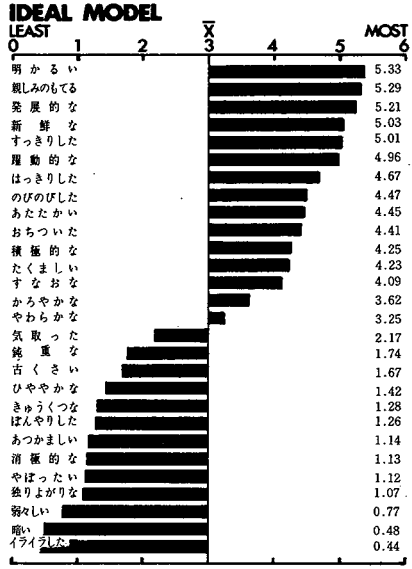
国旗〈日の丸〉のデザインを考える

ところで，われわれにとって理想的な国旗であるためには，その国旗のデザインはどのようなイメージ・プロフィールを持つものでなければならないのだろうか。そこで，この点についての具体的内容を知るために次の実験を試みた。

〈実験Ⅰ〉

この実験では，京阪神，及び滋賀県在住の18才～70才までの男女99名の被験者に対して有意な形容語28個の中から，国旗にはこのようなイメージが特に必要であると判断されるものをまず4個選ばせ，以下同様に，順次，必要度の高いと判断されるものから，4個づつ，7段階（得点は6～0）に評価し，順位をつけさせる強制選択による多面診断法によりおこなった。

図1　国旗の理想的イメージ特性



〈実験Ⅰ〉の結果は（図－1）に示すが，これによれば,「われわれにとっての国旗」に対して最も強く望まれているのは「明るい」イメージであり，次いで，「親しみのもてる」イメージ」及び「発展的な」イメージであることがわかる。さらに，この3つのイメージとほぼ同レベルで強く望まれているものとして,「新鮮」で「すっきりした」イメージや「躍動的な」イメージがつづいている。また，この反面，「イライラした」イメージや「暗く」,「弱々しい」,

及び「独りよがりな」イメージは，国旗に対しては最も避けねばならないものとして判断されていることがわかる。また，この実験結果からは，男女の別による差はあまり見られなかったが，世代別に見た場合には，いわゆる，30代以下の戦後派とも呼ばれる世代と，40代以上の戦前派とされる世代との間には，若干の異なった傾向がみられるようである。

まず，国旗に最も必要なイメージとして第1段階に選択された4つの形容語についてみると，〈実験Ⅰ〉による第1順位の「明るい」イメージに関しては，30代以下の被験者のうち，52.7％が，第1段階の4つの形容語のなかに，これを入れているのに対し，40代以上の世代では72.0％となり，年令層が高くなるほど，国旗に「明るい」イメージを求める傾向が強くなっていることがわかる。また，第2順位の「親しみのもてる」イメージについては，世代間の差は殆んどないが，第3順位の「発展的」なイメージについては，同様に，58.1％に対して36.0％となり，これに関しては，逆に若い世代の支持率が高くなっていることがわかる。若い世代に「発展的」イメージを強く求める傾向がみられるのは，それだけ，将来に対する期待感が大きいからとも考えられ，40代以上の世代に「明るい」イメージを強く求める傾向がみられる点については，やはり，過去の歴史的経過から，〈日の丸〉に対して，戦争にまつわる悲しみ，苦しみの思い出からくる暗いイメージが潜在的にある程度あるからであるとも考えられる。

昭和45年1月6日のサンケイ新聞社の調査によれば，東京，大阪在住の1200名の回答者のうちの61.6％が，〈日の丸〉が日本のシンボルであると認めており，このうちの32.6％が〈日の丸〉に対して「明るく，すがすがしい」と感じ，25.4％が「親しみと愛着を感じている，と報告されている。このことは，〈実験Ⅰ〉の結果と符合しており，〈日の丸〉の旗が日本のシンボルとして，イメージ的にも最もふさわしいものであり，ある時期，暗い時代があったにせよ，日本国民の心の中に〈日の丸〉が広く定着していることをものがたっている，

とみてよいであろう。

では，〈実験Ⅰ〉によって示されたようなイメージ特性を有する〈日の丸〉の旗の理想的プロポーションとは，具体的にはどのようなものとなるのであろうか。

〈日の丸〉の旗の形は矩形であるが，このデザインを考える際，矩形の長辺と短辺との比率と，それによってつくり出された，ホワイトスペースと日章の赤い正円の大きさとの相対的な関係によって生み出される視覚的バランスのあり方によって，旗そのものの持つイメージ的強さと，その性格を大きく左右されるので，この点について検討を加えた。

一般的に，矩形においては，その縦横比が黄金分割比（1：1.618）やルート矩形（特に$\sqrt{2}$矩形），もしくは，それに近い比率を持つものが，見る者に美感を与えるものとして，比較的好まれることはよく知られている。筆者の実験（滋賀大学教育学部紀要・第26号・74Ｐ）によっても，縦横比が1：1.4～1：1.6までの矩形が最も好まれることが確かめられているが，〈日の丸〉の旗の場合，「57号」様式によるものも，「651号」様式によるものも，いずれもその縦横比は1：1.429であり，1：1.5であるから，一般的に最も好ましい印象を与える範囲内にある形であることがわかる。

ところで，昭和39年，東京オリンピックを開催するにあたって，オリンピック組織委員会は，オリンピック開催中に掲揚する，参加各国の国旗のうち，日本のみは，国旗の規格が正式に決まったものがなかったので，〈日の丸〉の旗のデザイン規格を急ぎ決定する必要にせまられていた。そこで，3月5日に，日章旗規格決定会議が開催されたが，その席上，従来より，法的にみて，いずれが有効か無効か，をめぐって論議の対象となっていた「57号」様式と「651号」様式の〈日の丸〉の他に，もうひとつのニュータイプの〈日の丸〉の旗が提案され，これら3種の〈日の丸〉の旗について比較検討されることとなった。

このニュータイプの〈日の丸〉の旗とは，グラフィック・デザイナーの永井

一正氏等によって提案されたもので，この〈日の丸〉の旗のデザインは次のようなものであった。

① 短辺と長辺との縦横比は2：3。

② 日章の直径は短辺の3分の2。

③ 日章の中心位置は旗面中心と一致。

このニュータイプの〈日の丸〉の旗が考え出された主な理由は次の点によるとされている。すなわち，「諸外国の国旗と比較しても〈日の丸〉の旗は，決して遜色ない素晴しいデザインであることは認める。しかし，現在，習慣的に用いられている〈日の丸〉の旗は静かな気品を感じさせはするものの，消極的でひ弱いイメージを感じさせる点に不満が残る。したがって，日章の直径を，従来のそれより大きくすることによって，視覚的強さと発展的イメージを出す必要がある。」としている。当初，オリンピック組織委員会では，この永井一正案によるニュータイプの〈日の丸〉のデザインを採用したい意向を示していたが，結局は，「651号」様式の〈日の丸〉の旗が，国旗として，開催期間中に掲げられることになった。しかし，残念ながら，先にも述べたごとく，一般に使用されている〈日の丸〉の旗というものは，「57号」様式か，又は「651号」様式に従ったものであるかのいずれかである，とも言えず，むしろ，そのプロポーションはまちまちであり，極言すれば，幾百，幾千という，形の異った〈日の丸〉の旗が存在する，あいまいな状態におかれているのが現状である。

では，我々は国旗としての〈日の丸〉像を具体的にはどのようなプロポーションとして意識の中にとらえているのであろうか。そこで，〈日の丸〉の旗は，このようなプロポーションをしている，と人々が考えている，いわば，〈日の丸〉の旗の概念的視覚像がどのようなものであるかについて調べてみた。

〈実験II〉

この実験は18才～86才にわたる，東京，大阪，京都に在住する男女113名を対象に，次の方法によりおこなった。

400㎜×300㎜の白ケント・デザインボードの中央に，直径100㎜の日章（ナフソール・レッド・ライト）を描いておき，被験者は黒色のＬ字形のトリミングマスク２枚を使用して，日章と旗の矩形とのバランスを調整し，〈日の丸〉の旗とはこのようなプロポーションをしている，と判断されるものを再現して行く。これを実測した結果，〈日の丸〉の旗の短辺と長辺の縦横比（以下，ＹＸ比）の平均値は１：1.410（標準偏差0.14）。日章の直径と短辺との比（以下，ＲＹ比）の平均値は１：1.956（標準偏差0.18）であった。この実験によるＹＸ比とＲＹ比とはー）0.531の負相関となっており，〈日の丸〉の旗のプロポーションを横長に意識している者ほど，日章の直径を大きくみていることがわかる。

この実験IIによる〈日の丸〉の旗のプロポーションはＹＸ比が１：1.410であり，$\sqrt{2}$矩形におけるＹＸ比，１：1.414に対して極めて近似値である。つまり，$\sqrt{2}$矩形の長辺が，わずかに0.３％だけ短縮された形となっている。したがって，実験IIによって得られた〈日の丸〉の旗の概念的視覚像の矩形は，$\sqrt{2}$矩形そのもの，とみて差支えないといえる。一方，日章の大きさは「57号」様式や「651号」様式のそれと比較した場合，その直径はやや小さく，両様式の日章の直径に対して，約85.2％の値となっており，この数値は長辺の11分の４に対して99.7％の値となっている。

それでは，国旗として最も望ましいイメージプロフィールを有する〈日の丸〉のプロポーションとはどのようなものであろうか。

この，〈日の丸〉の旗の理想的プロポーションのモデルを得るために，次の実験をおこなった。手続きは実験IIと同様の方法を用いたが，被験者は日ごろより，造形分野での仕事，研究にたずさわっている，グラフィック・デザイナー，フォトグラファー，画家，彫刻家，テキスタイル・デザイナー，及び，滋賀大学教育学部美術科学生等，計79名（年令は18才～62才）であり，これらの被験者に，〈日の丸〉として最もイメージ的にバランスのとれた，理想的プロポーションの具体的な形を各々示させた。〈実験III〉

この実験Ⅲによって得られたモデルのＹＸ比の平均値は１：1.417（標準偏差0.29），ＲＹ比の平均値は１：1.701（標準偏差0.29），ＹＸ比とＲＹ比の相関係数ｒは，－）0.424であった。このＹＸ比１：1.417という値は，$\sqrt{2}$矩形のＹＸ比に対して極めて近似値であり，$\sqrt{2}$矩形の長辺の100.2％にあたる。したがって，これもまた$\sqrt{2}$矩形そのものとみてよいといえる。また，この値は「57号」様式の〈日の丸〉の旗のＹＸ比１：1.429に対しても近似値であり，長辺の99.2％に相当する。一方，ＲＹ比の数値は短辺に対して，約51分の30（51分の30に対して99.94％の近似値）の大きさの日章であることを示している。「57号」様式の日章は短辺の５分の３であるが，これに対しても98％の値となる。したがって，実験Ⅲによって得られた〈日の丸〉のモデルは，「57号」様式の〈日の丸〉の旗に極めてよく似たプロポーションであるといえる。$\sqrt{2}$矩形は，矩形のプロポーションとしては，視覚的にもバランスのとれた非常に美しいものであり，それを好む人が多いことから，〈日の丸〉の旗の場合も，実験Ⅲによって，$\sqrt{2}$矩形によるものが最も理想的なプロポーションである，という結果が出たことは十分にうなづけるものであるといえる。

実験Ⅱ，及び，実験Ⅲによって得られた両モデルは，いずれも$\sqrt{2}$矩形そのものといえるが，日章の大きさについては，かなりの差がみられる。そこで，旗の形が$\sqrt{2}$矩形である場合，日章の直径の変化によって，どのように視覚イメージが変化して行くか，その変動量を測定することにより，実験Ⅰ，及び実験Ⅲの結果をふまえたうえで，理想的なイメージ・プロフィールをもつような，最も総合的にバランスのとれた状態になる部分をさがし出し，〈日の丸〉の旗の理想的なプロポーションを有する最終モデルを得ることを目的として実験Ⅳをおこなった。この実験は，19才～66才までの男女各20名，計40名（会社員，主婦，学生，教員）に対して，以下の手順により実施した。120㎜×169.7㎜（ＹＸ比１：$\sqrt{2}$）の白地の矩形の中央に，直径が45㎜から５㎜間隔で増大し，95㎜にいたる11段階の大きさに変化する日章を描いた〈日の丸〉のサンプル，

11枚を用意し，その各々について被験者は検討すべきイメージの項目別に，5段階評価によって，そのイメージの強弱の度合を評価して行く方法をとった。（図２～５）

図2 実験IVにおける日章の直径の増減に対するイメージの変化

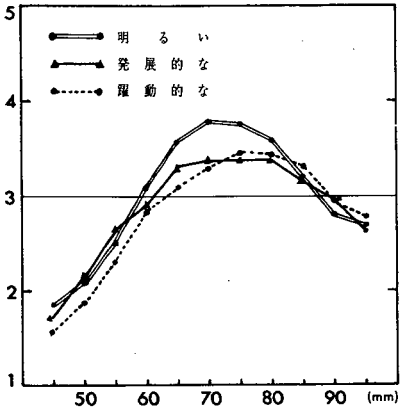


図4 実験IVにおける日章の直径の増減に対するイメージの変化

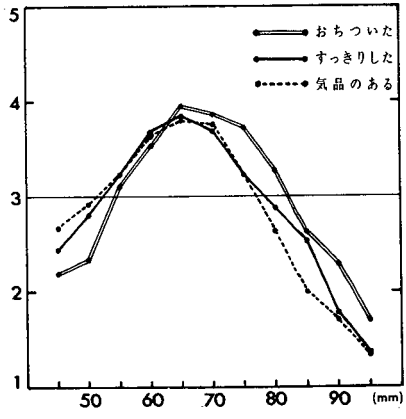


図3 実験IVにおける日章の直径の増減に対するイメージの変化

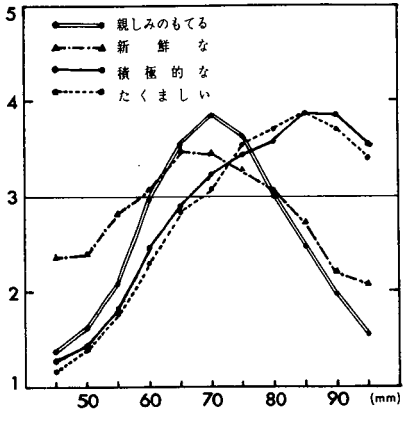
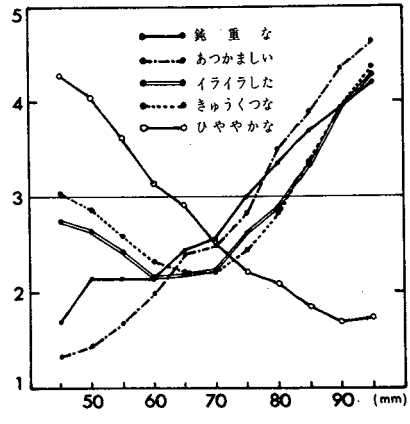


図5 実験IVにおける日章の直径の増減に対するイメージの変化



この結果，実験Ｉで，国旗に最も必要なイメージとして第１位にランクされた「明るい」イメージ，第２位の「親しみのもてる」イメージは，共に日章の直径が70㎜前後のとき，最も強くなることがわかり，同様に，第４位の「新鮮

な」イメージ，及び，「すっきり」して「おちついた」，「気品のある」イメージについては，65㎜前後のとき，最も強くあらわれることがいえる。「躍動的な」イメージは75㎜のとき。「積極的」で「たくましい」イメージは85㎜のときに最も強くなる。その反面で，負要因としての「きゅうくつ」で「イライラした」イメージは各々，70㎜，及び，60㎜のときに最も少くなり，それよりも日章の直径が大きくなっても，小さくなっても，そのイメージは強まってくる。なお，「きゅうくつ」で「イライラした」イメージについて，被験者の反応の型が2つあるようである。つまり，〈日の丸〉の旗のデザインにおいて，$\sqrt{2}$矩形に対して日章の真径が小さくなった場合の，白地の面積の増大による視覚的イラダチ感を強く意識するタイプと，日章の直径の増大によって生じる圧迫感を，強く意識するタイプとがある。このうち，前者は男性に多くみられるようである。以上のことを，実験Ⅰの結果をふまえて総合的にみると，実験Ⅳによれば，日章の直径が70㎜前後のときに，イメージ的には最もバランスがとれた，好ましい状態になると判断してよい。デザインの再現性を考慮した場合，いかなる大きさの〈日の丸〉の旗であっても，矩形の大きさに対応して，日章の大きさも適確に再現することができるための，具体的で，実際的で，わかりやすい比率を定める必要がある。実験Ⅲによって導き出された〈日の丸〉の日章の直径は，短辺の51分の30のとき，最もすぐれたイメージをもつ〈日の丸〉の旗となる，としているが，この場合のＲＹ比１：1.701を実験Ⅳの日章にあてはめると，その実長は70.55㎜となる。したがって，最もイメージ的にバランスのとれた，好ましい状態になるのが日章の直径が70㎜前後のときである，という実験Ⅳの結果は，実験Ⅲによって導き出された〈日の丸〉の旗のプロポーションが，一般的にも受入れられる，すぐれた内容をもっているものであることを裏付けるものであるとしてよい。

国旗〈日の丸〉において，理想的なプロポーションとなる，と判断されるのは，旗の形が$\sqrt{2}$矩形のときであり，日章の直径がその短辺の51分の30になる

ときである，としてよいので，この実験Ⅲによるものを，最終モデルと仮定する。そこで，この最終モデルが〈日の丸〉の旗のデザインの改良として，成功しているかどうかを判定するために，次の４つの〈日の丸〉の旗のモデルを用意し，検討してみた。

《モデルＡ》　実験Ⅲ，Ⅳから導き出されたモデル。

《モデルＢ》　太政官布告第651号の様式によるもの。

《モデルＣ》　永井一正氏等による，ニュータイプの〈日の丸〉の旗。

《モデルＤ》　実験Ⅱによる概念的視覚像としての〈日の丸〉の旗。

なお，「57号」様式の〈日の丸〉の旗は，そのプロポーションが《モデルＡ》と，ほぼ同一であるため，視覚的にはほとんど差がない，と判断されるため，《モデルＡ》に含めて考えるものとした。各々の〈日の丸〉の旗の規格は（表Ａ）のようになり，その具体的なプロポーションを（図６～９）に示す。

図６

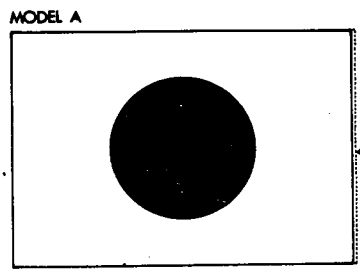


図８

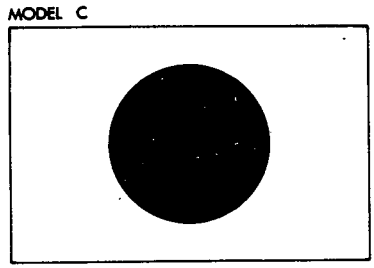


図７

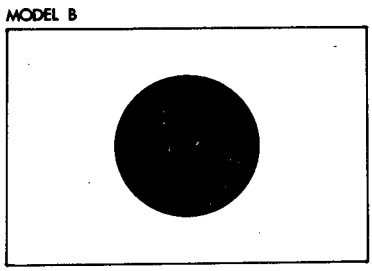
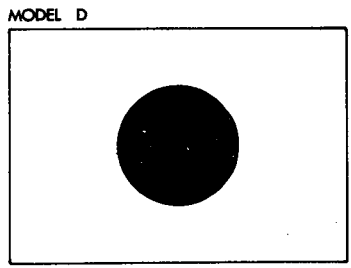


図９



これらの4つのモデルに対し，実験Ⅰと同じ手順で，有意な形容語，28個の中から，最も強く感じられるイメージから，4個づつ，順次に7段階にわけて評価する，強制選択法による実験をおこなった（実験Ⅴ）。この実験の被験者は18才～70才にいたる，男45名，女65名の計110名であった。実験Ⅴを実施する際の〈日の丸〉の旗のモデルは，（表A）による規格にもとづき，次のような大きさのサンプルを別につくり，使用した。

表A 実験Ⅴで使用した〈日の丸〉の実験モデルの規格

モデル	縦横比	日章の直径	日章の位置	備　　考
A	1：$\sqrt{2}$	短辺の 30/81	旗面中心	実験Ⅲ，Ⅳにより導きだされたモデル
B	2：3	〃 3/5	〃	太政官布告第651号による様式
C	2：3	〃 2/3	〃	永井一正等によって提案されたモデル
D	1：$\sqrt{2}$	長辺の 5/11	〃	一般の〈日の丸〉の概念的視覚像

《モデルA》　240㎜×339㎜，日章・141㎜

《モデルB》　240㎜×360㎜，日章・144㎜

《モデルC》　240㎜×360㎜，日章・160㎜

《モデルD》　240㎜×339㎜，日章・123㎜

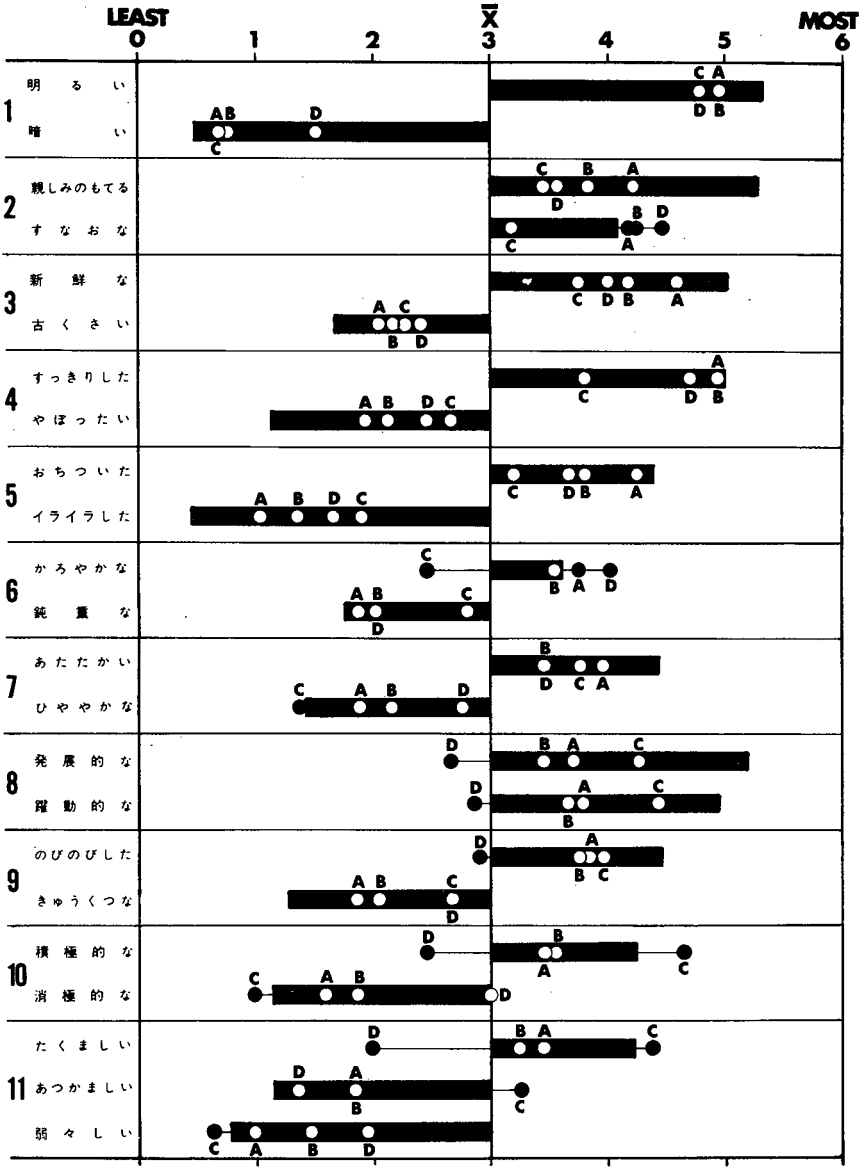
110名の被験者による段階得点の平均値を求めたものを，実験Ⅰと比較してみた結果を（図10）に示す。まず，実験Ⅴの結果から，各モデルのイメージ特性は次のようなものであるといえる。

《モデルA》・すっきりまとまっており，明るく，はっきりしたイメージを持っている。また，新鮮さを感じさせ，親しみのもてる印象をも強く与える。しかし，発展的イメージはあまりない。

《モデルB》・モデルA同様，すっきりまとまっており，明るく，はっきりしており，すなおな印象を与える。

《モデルC》・明るい印象も強く，はっきりしているが，積極的でたくましく，躍動感もかなり印象づける。したがって，発展的イメージが，他のモデルと比

図10　理想の国旗像と４つのモデルの特性比較



較して，かなり強く前面に押出されている。しかし，その反面，日章の直径が大きくなったために，その影響により，あつかましく，独りよがりで，きゅうくつな印象を強め，イライラしたイメージを増大させる，という結果になっている。

《モデルD》・明るく，すっきりとしたイメージは，他のモデルと比較しても劣るものではないが，日章の直径が小さいために，軽やかで，すなおな印象が強くなっている。しかし，このために，逆に，消極的で弱々しいという印象も強まっている。

次に，実験Vによる，各モデルのイメージ持性のレベルが，理想的なレベルにどれほど近づいているか，という点についてみる。28個のうちの23個の形容語をもとに，(図10）では11クラスターに分類したが，1から7までのクラスターにおいては，《モデルA》が〈日の丸〉のデザインの改良として，成功していることを示している。すなわち，実験Iにおける第1順位の「明るい」，第2順位の「親しみのもてる」，第4順位の「新鮮な」，第5順位の「すっきりした」，第9順位の「あたたかい」，第10順位の「おちついた」イメージにおいては，いずれも，他の3モデルの得点を上廻っており，もっとも理想的レベルに近づいていることがわかる。また，国旗には最も避けねばならない，「暗い」，「イライラした」イメージについては，他の3モデルに比較し，より少く，それだけ好ましい状態にあることを示している。

8から11までのクラスターでは，《モデルC》の得点が，他の3モデルを全て上廻っており，このクラスターにおける各イメージに関しては，〈日の丸〉の旗のデザインの改良として成功していることを示している。

すなわち，第3順位の「発展的な」，第6順位の「躍動的な」，第8順位の「のびのびした」，第11順位の「積極的な」イメージでは，他のモデルの得点を上廻っている。したがって，《モデルC》は，発展的で，積極的で，しかもたくましく，躍動感にもあふれ，といったイメージ的効果は十分に出ているといえ

る。しかし，同時に，きゅうくつで，イライラしたイメージも，それだけ増大しているため，《モデルA》のような，総合的にバランスのとれた状態からは，やや遠のくと判断できる。また，〈明るく，はっきりした〉イメージにおいては，4モデル共，ほぼ同じ水準にあり，しかも，理想的レベルに近いところまでに達している。このことは，〈日の丸〉のプロポーションが少々違った場合に生じる，各イメージの強さの変化があったにしても，明視性という点では，全モデル共シンプルなデザインであるために，きわめてすぐれた要素をもっていると解釈できる。

以上のことから，国旗に対するイメージの要求度順位を考慮した場合，《モデルA》のプロポーションが，国旗〈日の丸〉のデザインとして，最も総合的にすぐれた内容をもっており，デザインの改良として成功しているといえる。なお，4つの〈日の丸〉のモデルが，国旗の理想的状態になるための，イメージ的条件を，具体的にどの程度満たしているかについて，定量的に示すことは困難だが，その1つの目安になるものとして，次の操作を行うことにより，イメージ的満足度が，どの程度であるかをみてみた。実験Iによって国旗に必要なイメージの順位が示されたが，段階平均点にして4.5以上の高得点を得た第1順位から第7順位の7つのイメージについて，第1段階に占める合計得点（この場合は，第1段階に選ばれるべき4つのイメージに対して，1位の4点から4位の1点までの評価点を与える）を100とする。

同じ手順により，他の4つのモデルに対し，実験Vによって得られた，この7つのイメージの各々の第1段階における評価点を算出し，理想像の合計得点に対する割合いをみることによって，イメージ的満足度が，どの程度であるかをみてみた。なお，理想像における第1順位の「明るい」イメージから，第7順位の「はっきりした」イメージまでの評価点の合計得点は，28個の全イメージの総得点に対して76.3%を占めていた。各モデルのイメージ的満足度は，理想像を100とした場合，次のようになった。《モデルA》79.8%，《モデルB》

72.1%，《モデルC》59.5%，《モデルD》56.2%。

したがって，これまでの各実験結果からみて，国旗〈日の丸〉が，イメージ的にもバランスがとれ，もっとも好ましい状態となるのは《モデルA》に示されたように，その形が$\sqrt{2}$矩形のときであり，日章の直径が，その短辺の51分の30（日章は旗面中心）になるときである，としてよい。

ななお，実験Vを110名の被験者に対して実施した際，その終了後に，4モデルを比較させ，各被験者に，〈日の丸〉の旗として，，最もふさわしく思えるものを選択させたところ，《モデルA》50名（45.5%の支持率），《モデルB》34名（30.9%），《モデルC》13名（11.8%），《モデルD》13名（11.8%）の支持を得た。そして，これの世代別の支持傾向をみると，30代までが《モデルA》40.8%，《モデルB》30.2%，《モデルC》14.5%，《モデルD》14.5%の支持率であるのに対し，40代以上では，《モデルA》55.9%，《モデルB》32.3%，《モデルC》5.9%，《モデルD》5.9%の支持率であった。

世代を問わず，《モデルA》を支持する割合が最も高くなっているが，特に40代以上の人々の《モデルA》に対する支持率が高いのが目立っている。又，《モデルC，D》を支持する人が40代以上の年令層には，ほとんどないことに注目したい。この現象は，年令の高い層ほど，それだけ〈日の丸〉の旗に，いろいろな形で馴れ親しんで来た期間も長く，〈日の丸〉というものが，意識の中に定着して来たであろうことから，〈日の丸〉の日章の直径が拡大され，又は，縮小されることによって生じる，イメージの変化に対して違和感をいだくためであろうとも解釈できる。

これに対して，30代以下の若い年令層においては，社会生活における価値感の変化，及び，その多様化という面から，イメージの選択の基準にも幅があり，A，Bのみならず，C，Dを良いと判断する者が比較的多くなっているものと思われ，この傾向は20代以下に特に強くみられる。

これは，国旗に対する意識に，世代的な差があり，40代以上の人々が，国旗

は大切なものであり，その国旗〈日の丸〉はこういうものである，又は，このようなものでなければならない，という比較的明確な形での国旗観を持っているのに対し，若い世代，特に20代以下の人々には，国旗に対する関心があまりなく，したがって，明確な形での国旗観もないために，〈日の丸〉のポロポーションのあり方についても，むしろ，ややもすれば感覚的好みが前面に出る傾向がみられるためであろうと考えられる。

結　　論

国旗〈日の丸〉の理想的なプロポーションは，一連の実験結果を総合的に判断し，その縦横比が1：$\sqrt{2}$，日章の直径は短辺の51分の30になるときである。

また，従来，「太政官布告第57号」様式による〈日の丸〉と「太政官布告 第651号」様式による〈日の丸〉の，いずれが法的に有効か無効か，という観点から論じられ，いまだ結論が出ない『〈日の丸〉論議』であるが，この論に従うならば，国旗としての本来的あり方を考えた場合，イメージ的にも，ほぼ理想的レベルに達っしていると判断された《モデルA》の〈日の丸〉と，同一といってもよいほど近似値的なプロポーションを有する，「57号」様式の〈日の丸〉を，国民旗〈日の丸〉として，正式にとりあげることが妥当ではないか，と考えられる。

おわりに

国旗〈日の丸〉は，きわめてシンプルで明快なデザインであるため，視覚的効果も強く，すぐれた国旗であるといえるが，〈日の丸〉に対する個々の対応の仕方には，性格，価値感の違い，思想的な立場上の違い等によってかなり複雑な面があることを，この調査を通して，改めて感じた。国旗〈日の丸〉を考える場合，もちろん，デザイン上の観点から調和とバランスがとれていることも重要であるが，その方向づけというものは，あくまで国民の生活感情に沿った

ものであると同時に，その時々の時代の流れに迎合したものであってはならないと考えられる。この意味において，今回の〈日の丸〉の旗の改良試案ともいうべきものは，決して十分に満足すべきものではないが，何等かの形で〈日の丸〉を改めて考える際の参考になれば，と思う次第である。今後は，さらに今回の調査結果を基礎として，国旗〈日の丸〉について研究を進めて行きたいと思っている。

文　献

- 高橋賢一　「旗指物」　人物往来社　1965
- 藤沢　優　「国のシンボル」　頌文社　1970
- 藤沢　優　「世界の国旗・国歌総覧」　岩崎書店　1976
- 国民文化協会編　「事典・シンボルと公式制度」　国階図書　1968　国際図
- サンケイ新聞社編　「意見と意識の百科事典」　1972
- Edited by E. M. C BARRACLOUGH　「FLAGS OF THE WORLD」 WARNE　1969
- 岡山誠司　「表示と記録のテクニックII」　総合科学出版　1968